

嘉永・安政期の大坂町奉行川村修就

——ロシア軍艦ディアナ号来航問題と
安政の南海地震に伴う大坂大津浪（津波）への対応——

菅 良 樹

はじめに

幕領統治を分担していた遠国奉行の一つである大坂町奉行は、定員二名で、格式は一五〇〇石高、役料は現米六〇〇石で、与力三〇騎、同心五〇名を、それぞれ従えていた。町奉行は、使番、目付、遠国奉行から選任され、数年の勤役後、他所の遠国奉行などに転出した。図1に掲げたとおり、町奉行東御役所（東町奉行所）は京橋口門外、西御役所（西町奉行所）は、追手口門外より上町台地を西へ下った東横堀沿いに設けられていた。

まず、大坂町奉行および町奉行所に関するこれまでの研究を左に掲げ、本稿のねらいを述べる。

村田路人氏は、元禄期に伏見奉行、堺奉行が廃止され、それに伴い、大坂町奉行が三名に増員され、城代の地位が引き上げられたとする重要な指摘をした。^①

熊谷光子氏は、享保改革期から明和・安永期にかけての町奉行所行政に焦点を当て、明和三年（一七六六）の仕法改正に注目している。同氏はこの改正により、遠国出入裁許権が江戸の勘定奉行所などに移され、大坂町奉行所で債権者の権利が保証されなくなり、西国経済に打撃を与えたとした。そこで、安永三年（一七七四）には旧に復され、町奉行支配国の四ヶ国と西国間の吟味や出入は、改めて、大坂町奉行所の所管となったと検証した。^②

内田九州男氏は、天保期において町奉行の矢部定謙が城代の土井利位に、「仕置」（刑罰）や「公事」（民事訴訟）についての「伺」を出し、「差図」を受けながら、諸般の行政を執行していたことを初めて明確にし、幕府上方支配機構を究明するうえで画期的な成果を上げた^③と考える。

野高宏之氏は、町奉行所には役所、公事場、御用部屋の外に当番所があったことを発見し、その当番所を中心に各種の届や訴訟を受



図1 天保大坂図

(旧版『大阪市史』附図 清文堂、1979年復刻)

理するなど、与力の勤務実態を詳細かつ具体的に述べた。^④

曾根ひろみ氏は、町奉行所与力、同心の職務を分析し、その優秀さよりも年功が重視されたこと、有能な者ほど兼務が多く仕事量が増加し、配置転換も頻繁で専門官僚が育成されにくかったこと、町奉行所の実務は数年で交替する町奉行ではなく、大坂居付きの与力、同心が担っていたこと、さらに与力が決定した量刑などが、城代によって原則変更されることはあまりなかったこと、を論証した。^⑤

藪田貫氏は、町奉行日記の所在を調査して、その研究の重要性を提唱し、渡邊忠司氏の研究は歴代の町奉行の政治・行政活動について述べ、藤井嘉雄氏の研究は刑罰を中心に町奉行所行政を考察した。^{⑥⑦⑧}

村田氏、熊谷氏、内田氏の研究は、町奉行と城代の関係に詳細に触れながら、元禄期～天保期における幕府上方支配機構の改革や西国行政について論じたものである。一方、野高氏、曾根氏、藪田氏、渡邊氏、藤井氏の研究は、町奉行および与力、同心の職務や動向を具体的に捉えようとしたものといえる。

これらの先行研究を踏まえつつ、本稿では、後者の視点から、これまで研究が皆無に近い幕末期の大坂町奉行について論説する。大坂の都市行政は、町奉行所の実務の担い手であった与力・同心や、都市の自治の指導者であった惣年寄等によってなされていたが、ここでは町奉行自身の動向に注目する。その際に町奉行という「職」に留まらず、川村修就^{ながたか}という「人」、および川村家という「幕臣の家」についても考察していく。

一・では、川村家や修就の略歴を中心に述べる。つぎに二・では、新潟市歴史文化課所蔵の初代新潟奉行川村修就文書^⑨に残存する大坂町奉行在任中の記録を利用して、嘉永・安政期の大坂町奉行の動向と職務を明らかにする。川村家は幕臣として少禄であったが、家格、禄ともに高位の大坂町奉行に選任された修就は、書画や歌を愛し、砲術に打ち込み、文武両道に秀で、三河武士の美風を有していたという。その修就の遺志は、嫡男の修正^{なかつら}だけでなく孫の清雄^{きよお}（修寛^{しゅうかん}）にも強固に受け継がれたといえる。清雄は、維新後も徳川宗家と繋がり近代洋画家として大成したが、清雄のように開国に直面した幕府官僚の子孫が、明治期に政治や行政だけでなく、芸術の分野等においても日本の近代化に寄与したことは、きわめて興味深い。本稿では、このことについても言及する。

一・修就の初代新潟奉行から堺奉行への昇進

川村家は、代々「將軍家御庭番^{おにわばん}」の家筋で、禄高は二〇〇俵であった。修就は、天保十四年（一八四三）六月、初代新潟奉行、嘉永五年（一八五二）七月に堺奉行、安政元年（一八五四）五月に大坂町奉行（西）、安政二年（一八五五）五月に長崎奉行を歴任し、安政四年（一八五七）正月に小普請奉行、同四月に西ノ丸留守居に昇進した。そして、文久元年（一八六一）正月には大坂町奉行（東）に再任され、家禄は三〇〇俵を拝領するようになっていた。修就は、新潟奉行在任中の嘉永二年（一八四九）十二月に対馬守、西ノ

丸留守居在任中の万延元年（一八六〇）正月に壱岐守に任官している。

修就は、これまで御庭番として、上方や日光方面へ派遣されていたが、その公務をとおして、有能さが認められてか、勘定吟味役として天保の改革に関わるようになっていた。当時は、川村家だけでなく、梶野土佐守家や明榮飛騨守家など「御庭番」の家筋の者が、行政運営における有能さや情報収集能力の高さから勘定方へ昇進していた^⑪。こうしたなかで、修就は初代新潟奉行に拔擢され、遠国奉行として、幕領支配の一翼を担うようになったといえよう。

修就は、天保十四年（一八四三）六月、長岡藩より上知された新潟へ赴き、初代新潟奉行として、種々の幕領行政に取り組んだ。新潟上知の背景には、清国との密貿易である唐物抜荷事件と外国船に対する海防強化の問題があった。修就は、長岡藩から引き継いだ奉行所（元西堀通五番町、同六番町）の整備拡充につとめ、台場の整備と大筒の鑄造により異国船対応策を軌道に乗せた。新潟町の支配については、町会所制度の整備、物価の安定化、質素儉約の奨励、風俗の取り締まり、窮民政策を実施し、町の治安強化を推進したのである。また、長岡藩の砂防林の造成事業を受け継ぎ、耕地を拡大した。さらに修就は、仲金制度^{すけいん}を施行し、物資の掌握につとめ、その売買時に課税することで増税が可能となった。川村の新潟支配は、厳格であったが、多方面に亘り行き届いた施策であったという^⑫。川村は新潟において、諸般の業績を上げ、嘉永五年七月、堺奉行に昇



秋が深まり、信濃川河口ではサケの地引網漁が行われる。



鳥屋野潟のがたがた追い漁の音が遠く新潟の町まで聞こえてくる。冬が近い。



北西風に海が荒れるようになると囲い船が行われる。音頭取りに合わせて、ろくろで網を引いて、信濃川河口の河岸にベザイ船が引き上げられる。

図2 「蟹の手振り」

作者未詳。落款には「雪汀」とある。企画展展示図録『川村修就とゆらぐ幕府支配』（新潟市歴史博物館、2005年）より転載。鮭網の画、潟漁の画、囲い船の画を抜粋。

進し、こうして幕府上方支配機構の一員となったのである。新潟での家財道具などは、西廻り航路を利用して、江戸や堺へ廻送していた。¹³

川村と同様、大坂町奉行を勤め文化人としても著名な久須美祐庵^{すけとん}は、大坂に興味を抱き、見聞を広めて随筆「浪華の風」¹⁴や「在阪漫

録」¹⁵を残した。一方、川村は新潟赴任中に、当地の風俗に愛着を覚えて書き留めた随筆「蟹の手振り」^{あまさえす 16}や新潟の風俗図と詞書を卷子本に仕立てさせた図2「蟹の手振り」^{てぶ 17}を残しており、注目される。なぜなら、修就が遺族に託した著作や書画は、彼の大坂における行政活動に直接影響を与えるものではなかったが、明治期に洋画家となった孫の清雄に伝えられ、その一生に少なからざる刺激を与えたと考えられるからである。

さて、本稿で論じる大坂町奉行、堺奉行は、寛政十年（一七九八）の段階では、山口直清（家禄三〇〇〇石）、成瀬正定（家禄二〇〇〇石）、仙石政寅（家禄二七〇〇石）¹⁸など、相当の格式と禄高を有する幕臣から任命されていた。ところが、川村修就およびその相役の佐々木顕發^{あきふ}は、家禄一〇〇〇三〇〇俵クラスの幕臣であった。幕藩制後期には、もとは佐々木のように幕臣の家来であった者などが、幕府官僚として大坂町奉行などの高位の役職に役料を増加されて就任するようになっていた。これは、驚くべきことである。幕末期には、幕臣株が売買されていた可能性があり、出自が定かではない幕臣からも、大坂町奉行、堺奉行などの格式の高い要職に、職務上の実績あるいは能力が評価されて選任されるようになっていたのである。¹⁹

修就は、先述したとおり、砲術だけでなく、和歌、絵画に対して造詣が深かった。その修就の遺志を受け継いだ孫の清雄は、徳川宗家の給費生として渡米後、パリついでヴェネツィアで西洋画に関

する画法の研究を積んだ。清雄はヴェネツィア美術学校で装飾画の技法を学び帰国し、明治二十二年（一八八九）には、日本画が優勢なもとで西洋美術家の大同団結を唱え明治美術会創設の旗頭となった。日本の近代洋画の発展において、清雄の位置は極めて重要であるといえる。ただし、親族や三井物産、旧幕臣ネットワークに支えられた清雄の作品は、白馬会に代表される黒田清輝等の画風とは趣を異にし、江戸の気風を守り続けていたことは特記すべきである。

旧幕臣としての出自が、彼の芸術を理解するうえで不可欠であろう。ちなみに、祖父修就が二度目の大坂町奉行在任中に同伴し、来坂していた清雄は、武人の嗜みとして南画の大家田能村直入（小虎）²⁰を師としていた。このことは、彼の画風を考察するうえだけでなく、大坂に赴任した幕臣とその家族の上方での生活やその文化の摂取について検討していく際に、きわめて重要視すべきことである。当時、江戸や所領を離れ大坂に赴任した大名や幕臣とその家来が、どのような上方の文化人と接触し、いかにその洗練された文化を受容していたのかということは、まだまだ説明が不可欠な重要なテーマであるといえよう。

二、修就の大坂町奉行在任中の動向と職務

1. 町奉行の通常時における職務

川村修就は、嘉永六年（一八五三）～安政二年（一八五五）にかけての大坂町奉行在任中に「日新録」と題する「日記書拔」を残

した。この「日記書拔」より作成した表1をもとに、一年間にわたる町奉行の動向を具体的に検討していきたい。ただし、本書冊の表紙には「嘉永四年」とある。これは、たまたま嘉永四年の日記記載用の書冊が、同家に残存していたため、それを転用したからであろう。ところが、その内容は、川村が堺奉行から大坂町奉行へ転役していくことと、他の川村の「日記」とは異なり、天気等は省いて大坂町奉行在任中の主要な記事が挙げられている。これらのことから、本書冊は嘉永六年～安政二年の二年間におよぶ自筆日記中より、川村が重要な公務を中心に抽出した「日記書拔」とみられるのである。とくに嘉永七年（安政と改元）は、プチャーチンが大坂に來航し、その後には安政の南海地震に伴う大津波が大坂に襲来していた。まさに、その年の大坂町奉行の貴重な記録が新潟市での調査で見えたことは、きわめて幸運であった。

川村が堺奉行在任中の嘉永七年四月二十六日条によると、川村家の家来が大和河原で、大砲町打調鍊を実施していたことがわかる。当時、大坂定番、大坂町奉行、堺奉行が与力・同心に大和河原で砲術の演習をさせる時勢となっていたが、川村のような大坂に在任していた幕府官僚の家来も、大和河原を演習場として使用し、軍事訓練をしていたことが判明するのである。川村は、新湊時代には、荻野流大筒を鑄造させ、家来らと訓練をしていたが、堺ではホイットスル砲、カノン砲、モルチール砲といった西洋砲の操作をさせていたことが記されており、興味深い。このように、川村が栄達を遂げ

た背景には、役方としての実務能力だけでなく、西洋流砲術に精通していたことにより、番方としての能力が買われていたことを改めて強調しておきたい。²²⁾

川村の堺奉行から大坂町奉行への転役により、川村家およびその家来は家財などの荷物を船で大坂に廻送した。嘉永七年六月十日、先用として用人、書翰、右筆、帳付などが出発し、十三日には川村家の家族や家来の家族が堺を発った。十四日には修就が堺を出立し、陸路をとり、その日のうちに東横堀川沿いの大坂町奉行所西役所に到着した。さっそく翌日から、川村は慌ただしく町奉行としての職務を遂行していたのである。

さて、町奉行の職務に関して、重視すべき事項を摘記していこう。

まず、表1によると、「六」の付く日、つまり、六日、十六日、二十六日を中心に宿次寄合が開催されていたことがわかる。その他、將軍家の祭日、忌日、五節句などの祝日にも寄合が開かれた。宿次寄合は、原則月に三〜四度の割合で開催され、その寄合には、城代、定番、町奉行、大坂目付が参会し、書類の発送事務は、城代方家中の家老、公用人、右筆がおこなった。寄合は、まさに「大坂の重職者による最高評議機関」であり、江戸の老中へ向け、儀礼上の書状や、大坂の行政についての文書が、この寄合後に発信された。ただ、「六ノ日」の定例日以外にも、儀礼上、行政上、必要に応じて臨時の寄合があった。²³⁾ ちなみに、表1における「宿次城入」

という記述は、宿次寄合のための城入である。ただ単に「城入」と記載されている箇所は、城代と町奉行が、宿次寄合のためだけでなく、訴訟をはじめ西国行政についての用談をするために登城していたことを示している。

つぎに、町奉行の勤務日として重要なものは、表1、表2から明らかなように、「御用日」と「内寄合」がある。御用日は公事日、内寄合は評議日に相当するとみられ、月番町奉行所で裁判や用談がなされた。御用日は、原則二日、五日、七日、十三日、十八日、二十一日、二十五日、二十七日で、民事訴訟にあたる公事や訴訟が一日中審議された。月番の奉行は一日中立ち合う場合が多く、非番であれば、午後からなど、少し遅れて出席していたことが、ここに明らかとなった。城代や大坂目付が「公事聴」と称して、両町奉行所に出演してくる日も見受けられた。訴訟は、町奉行所与力が主に裁可していたが、城代や町奉行がなんらかの差図をする場面があったとみられる。内寄合は、原則四日、九日、十四日、十九日、二十四日、二十九日で、両町奉行によって、大坂および西国行政についての用談がなされていた。もちろん、その折には担当の与力が同席を求められる場合が多かったとみられる。御用日と内寄合の当日には、通常宿次寄合が開かれるなどして、町奉行が城入を求められることはなかったようだ。²⁴⁾

表2によると、町奉行の勤務日は、一ヶ月に十七日あり、その他に訴訟や行政上の用向きで、町奉行は城代上屋敷へ出向いていた。

表 1 大坂町奉行在任中の川村修就

嘉永7年（安政元年）4月～安政2年5月

年月日	事 項	年月日	事 項
嘉永7, 4, 26	尼崎又右衛門、大坂町奉行就任を伝える	23	上納金申渡
27	川村家家来、大和河原にて、ホーイッスル砲、カノン砲、モルチール砲町打	24	〃 終了
28	信濃守右筆金子六蔵此方給人とする	25	御用日立合、東御屋敷へ外出
29	城代上屋敷にて石谷因幡守跡役となる (中略)	26	宿次寄合のため城入 自分当役任命の下知状到来
嘉永7, 6, 3	金子、書翰に任命	27	御用日立合、東御屋敷へ外出
7	組与力・同心砲術	28	西組与力山本善之助より唐船到来の連絡
9	大坂行荷物、船等で廻す	月番 閏7, 1	組与力御礼 月番送り 東御役所より用人、書翰、書物入長持筆 筒持参 臨時宿次のため城入 小判、壱分判吹直御用取扱の命 老中御書付を城代より手渡される
10	大坂行荷物、船等で廻す	2	初御用日 信濃守、同用人、書翰、給人来宅
13	先出立、用人、書翰、右筆等	4	長崎奉行水野筑後守より書状 長崎会所入札、元通り五ヶ所の町人が参加可能となる
14	家内、家来の家内、大坂御役所へ転居	5	御用日 九時より信濃守立合 自分頭痛のため退出
15	堺出立、大坂御役所着	6	堀奉行自分跡役は関出雲守に任命される
16	東御役所へ外出、南都大地震	7	御用日訴訟105口、公事48口
17	宿次寄合のため城入	8	城入
18	大書院にて町人御礼	9	内寄合のため信濃守来宅
19	東西組与力御礼	13	川方申渡書交付、信濃守、用人立ち合う
22	御用日のため東御役所へ外出	17	建国寺御宮拝礼
23	公用人、書翰、先に派遣	18	御用日立合、信濃守来宅 目付代公事聴
24	城入	24	長崎へイギリス軍艦蒸気船到来 松平肥前守より届到来
29	信濃守同道専念寺参詣	25	御用日
29	諸家蔵屋敷留守居御礼 諸家留守居掟書調印に立合 退出後、兵庫・西宮印付同心、塩飽年寄、 兵庫・西宮名主、庄屋御礼	26	城入（宿次寄合カ）
24	寺社御礼、東御屋敷にて内寄合	27	御用日
29	町巡見	29	月番送り 用人、書翰派遣、諸書物、長持等送る
非番 7, 1	用人上原源八郎、給人野々村市之進江戸より帰着 城入 上納金申渡 石谷より引継書類到来	非番 8, 1	組与力御礼 (加番城入) 宿次寄合のため城入 宿次のため御用日中止
3	市中巡見	2	(大番頭仮城入) 長崎奉行荒尾石見守着坂、 イギリス船渡来のため差急の旅行 城代下屋敷にて城代同道面談
4	内寄合延期 天満組惣年寄見習誓詞	5	初入祝 組与力・同心、東組与力へ振舞 (大番頭交代) 宿次寄合のため城入 直に御用日立合のため東御役所へ廻る
5	上納金申渡	6	内寄合のため東御役所へ外出 牢屋見廻り
6	東御屋敷へ外出	9	城入
7	城入 上納金申渡	10	城入
8	組与力・同心、出入町人御礼 城入、城代本丸御殿御見分 定番、大番頭、目付代来宅	12	臨時宿次寄合のため城入
9	信濃守同道八軒屋乗船 大川浚え、波除山、天保山巡覽 安治川→木津川→道頓堀→門前	13	御用日立合のため東御役所へ外出
10	大坂三郷町人、兵庫・西宮町人へ上納金申渡	16	城入
11	信濃守同道 雑候場、堂島、天満宮、川崎御蔵、材木蔵見分	18	御用日立合のため東御役所へ外出
14	城入	21	川方与力より増水の報、同心1人堤見廻
17	城代同道天王寺参詣		
18	宿次寄合のため城入		
19	御用日立合、東御役所へ外出		
22	上納金申渡、内寄合延期 城代専念寺参詣、自分は自拝		

	御用日立合のため東御役所へ外出 城代公事御聴 22 城代同道専念寺参詣 24 門前にて乗船、川見廻り 大川、土佐堀川、木津川、道頓堀川 25 本丸御殿、御武器拝見 御用日立合のため東御役所へ外出 目付代公事聴 26 宿次寄合のため城入 27 御用日立合のため東御役所へ外出 28 堺表見廻り 上納大筒一覧、寄州堤一覧 29 内寄合のため東御役所へ外出		異船渡来につき諸廻船出入、口達触申渡 城入、直に目印山（天保山）へ出張 城代より廻付宿次発信 21 目印山より直に城入、夜帰宅 異船渡来中につき、御用日中止届を城代へ提出 22 城入 目印山へ出張、夜帰宅 23 早朝目印山へ出張 24 夜帰宅 明朝城入の連絡、御門継にて公用人宛に届ける 25 早朝より城入、直に目印山へ出張 異船渡来中につき市中、在方へ触書発令 26 夕方目印山より直に城入、夜帰宅 城代公用人より明朝城入を命じる連絡到来 27 早朝城入、直に目印山へ出張 御用日立合、出張中のため中止 28 異船へ水を供与、山本善之助が文書を持参 異船へ諸品供与の証書、信濃守が城代へ持参 29 堺奉行関出雲守、異船渡来中につき、早々に出立するとの書状到来 江戸より食料供与の下知到来 目付今朝着坂、箱館にてロシア船より提出された書付持参 信濃守が城代方へ外出 自分は天保山連泊
月番	9. 1 信濃守用人、月番書物持参 2 御用日立合、信濃守御用向につき欠席 5 御用日立合、信濃守九時より出席 6 宿次寄合のため城入 7 御用日立合、信濃守立合 8 天王寺参詣 9 組与力御礼 本丸参上 12 城入 13 御用日立合 御用済後、信濃守、坂本鉉之助、尼崎又右衛門来宅 14 内寄合のため信濃守来宅 15 松平肥前守より、オランダ蒸気船、5日長崎出帆の連絡 16 宿次寄合のため城入 極楽橋普請所見分 17 城代同道建国寺参詣 紀州蔵屋敷より同州加太浦にて泉州沖へ異船進入の目撃情報到来 相談のため東御役所へ外出 城代方使者と明日城入を決定 松平阿波守家来より淡州沖にて異船目撃届を提出 船手組与力の内、熟練者を呼寄 18 御用日のため公事場出席 信濃守立合のため来宅 堺奉行所組与力より泉州筋異船目撃情報到来 城入 異船西宮沖へ進入情報 川方より到来 城代へ天保山出張届を提出 江戸へ廻付宿次発信 ロシア人バツテイラ船で安治川を遡上 組与力山本善之助等駆付 市岡新田会所にて諸事申談 京都町奉行、伏見奉行へ連絡 城代が江戸へ廻付宿次発信 信濃守より諸家蔵屋敷へ有り合わせの者の出張を命令 城代より両定番組与力・同心出張を命令 城代家来も天保山へ人数差出 異船渡来の口達触発令を差図 19 異船応接掛申渡 東組与力八田五郎左衛門 西組与力山本善之助 城入、諸事申談 佐野亀五郎組与力太田資五郎 異船応接立合申渡	非番	10. 1 月番送り、家来派遣 城入 天保山へ出張 佐野亀五郎、父死去忌中であるが、御警衛御用勤を、城代より命じられる 京都より洛中、伏見、山崎守衛体制成立の連絡 ロシア船が幕府より証書を受け取れないのであれば、大坂へ乗り込むと強気の姿勢を見せる この交渉のため、終夜目印山詰 2 ロシア人、バツテイラにて川口へ侵入 昨日同様、筒井と川路が長崎にて手渡しという書面を持参 当方も小船にて応接の者を差出 3 ロシア船今朝、俄に出帆 八田五郎左衛門、太田資五郎を加太浦へ派遣 4 目印山へ出張 5 目印山泊 紀伊殿家来より異船加太浦碇泊 信濃守が、昨夜城代より渡された江戸よりの書付持参 6 木津川諸陣所等見廻 7 紀州屋敷より異船が大洋へ乗り出したという連絡到来 8 城入 東御役所へ外出、諸事談判 9 内寄合中止 10 城入 直に東御役所へ立寄 異船渡来につき徒目付、小人目付一同と面会 12 宿次寄合のため城入 御代替法令拝見

		<p>堺奉行関出雲守来宅、諸書物引渡</p> <p>13 御用日立合のため東御役所へ外出 ロシア船応接骨折につき山本善之助、八田五郎左衛門へご褒美下賜</p> <p>14 城代同道専念寺参詣</p> <p>16 城入 禁裏御書請御用の勘定奉行、同吟味役着坂、御材木見分</p> <p>17 異船渡来中のため在坂中の徒目付、小人目付明日出立、御用談之間にて面会</p> <p>18 御用日立合のため東御役所へ外出 牢屋見廻</p> <p>21 御用日立合のため東御役所へ外出</p> <p>23 川巡見</p> <p>24 内寄合のため東御役所へ外出</p> <p>25 城代公事御聴のため東御役所へ御越 ロシア船応接掛山本善之助 同 八田五郎左衛門 同 太田資五郎 へ城代より御褒詞</p> <p>26 城入、信濃守同道西之丸御蔵出来栄見分</p> <p>29 信濃守同道銅座にて長崎奉行水野筑後守と面会</p>			<p>11 川口荒所見廻 酒井雅楽頭家来より、去4日、5日地震にて加古川宿家屋多数損壊、替道工事完了の連絡</p> <p>12 見廻 道頓堀川筋、利光寺にて信濃守と落合再度貸付利銀取立、組の者へ申談</p> <p>13 荒所見廻りのため御用日立合中止 飛脚屋より江戸地震の連絡</p> <p>14 内寄合延期 城入 木津川等一覧</p> <p>15 信濃守川筋見廻、自分在宅 木津川入込大小廻船 617 安治川 〃 321 道頓堀川 〃 179</p> <p>17 城代より渡されたロシア関係書類16冊 信濃守へ回す</p> <p>18 御用日、訴訟等処理 寒入の宿次発信のため城入 地震、津波にて上納金取立見合を進達</p> <p>21 御用日立合、信濃守来宅</p> <p>22 専念寺参詣 米切手の口達案、専念寺にて信濃守と相談、惣年寄へ達</p> <p>23 城入 信濃守より相談のため、大坂戸口復古の書面到来</p> <p>25 御用日立合、城代公事御聴のため御越 城代へ透聞之場にて料理、御菓子差出 諸事終了後、信濃守へ料理、菓子差出</p> <p>26 宿次城入 下田へ津波襲来の連絡 都筑駿河守危うく一命を取りとめる</p> <p>27 御用日立合、信濃守来宅</p> <p>28 城入</p>
		<p>月番 11, 1 組与力月並御礼 月番送りのため東御役所用人、書翰来宅 城入 内山彦次郎、服部与一郎、山本善之助召連参上 御買上米取扱への御褒美申渡 西之丸御蔵見分</p> <p>2 御用日立合のため信濃守が来宅 目付安藤与十郎公事聴</p> <p>4 強き地震、余震続く</p> <p>5 立合のため信濃守来宅 夕方強き地震 今夜も一統立退の用意いたす 暮時、津波打ち寄せ 大被害発生の連絡 安治川口京都廻米置場見廻 地震、津波の件、江戸表へ進達</p> <p>6 本丸見廻は断る 木津川口、堀江、長堀川等見廻 津波被害甚大 片付方、東西地方、川方組与力、惣年寄へ命じる 堺にても所々損所、囚人切放</p> <p>7 難船荷物についての触書発令 信濃守、安治川見廻のため御用日立合中止 訴訟、糺し物、平公事申渡 城入 夜、長堀川、道頓堀川見廻 伊勢、志摩、尾張、被災状況報知</p> <p>8 安治川、長堀川、木津川、堀江、道頓堀川、京都廻米置場見廻 和光寺にて信濃守と落合 兵庫勘番より被災状況報知 負傷者無し、損壊家屋発生</p> <p>9 城入 堺切放の件、大久保より城代へ進達 内寄合延期</p> <p>10 川口荒所見廻 飛脚より地震損申立 見附、掛川、島田、藤枝、浜松、新居等</p>			<p>非番 12, 1 月番送り</p> <p>2 御用日立合、東御役所へ外出</p> <p>3 近海見分御用掛、内山彦次郎はじめ5人へ申渡</p> <p>4 内寄合、東御役所へ外出</p> <p>5 御用日、東御役所へ外出</p> <p>6 宿次寄合のため城入 道頓堀川船卸開始 備後町4丁目出火につき出馬、信濃守と落合</p> <p>8 宿次寄合のため城入</p> <p>10 信濃守同道、高麗橋出来栄見分 大坂戸口復古の調書3冊、近海浅深図3枚、東御役所へ回す</p> <p>13 東御役所にて公事御聴 (落丁) 13~23日分不詳</p> <p>24 江戸積廻油高書付、城代へ提出 勘助島出火につき出馬 加賀橋立浦幸栄丸より出火</p> <p>25 町人の歳暮御礼 宿次寄合のため城入</p> <p>27 道頓堀川船卸終了</p> <p>28 組与力歳暮御礼 歳暮城入 飛脚屋より長崎奉行人事等連絡</p> <p>晦 先日中より強い地震</p>

月番 安政2. 1. 1	組与力御礼 本丸参上、城内廻勤	19	天保山へ外出、信濃守も同道 船出不可
2	諸家蔵屋敷留守居御礼 宿次寄合のため城入	20	信濃守同道、津守新田会所へ外出 佐野亀五郎等と落合、御台場建設場所見分
3	年礼のため川口御役所へ外出 信濃守、年礼のため来宅 飛脚屋より江戸大火の注進	21	城入 直に東御役所へ外出、御用日立合
4	寺社御礼	22	専念寺参詣、自分案内 天王寺舞神楽見物、米倉丹後守も罷出
5	組与力へ盃振舞 兵庫、西宮地付同心御礼	23	城入中止、御用談
8	城入	24	大坂御役所出立、尼崎小休、西宮本陣泊
10	天王寺参詣	25	津知村小休、生田神社、築嶋寺、来迎寺参詣、兵庫泊
11	御用始 信濃守来宅、着替え城入 関出雲守相談事のため来宅 信濃守再来、奥へ通す	26	須磨寺参詣、舞子浜領主台場 大蔵谷本陣泊
13	城代、年始のため御越	27	領主浜屋敷、台場見分、明石泊
15	城入 国々廻船入津貝数江戸上り進達	28	和田岬台場建設場所見分、兵庫泊
17	城代建国寺参詣、信濃守風邪につき自分案内	29	岩谷村、新在家村、八幡村、東明村、石屋村、住吉村、魚崎村、横谷村、青木村、深江村、芦谷村、打出村を経て西宮浜会所着 途中灘目一の酒蔵柴屋又左衛門蔵見分 台場建設場所として問題箇所を仕置 西宮一向宗信行寺泊
18	御用日始、信濃守来宅	晦	尼崎、神崎、十三經由で着坂 当月御役料 99石6斗4升8合 銀換算7貫254匁3分7厘 72匁8分替 金換算金270両2朱と銀3匁5分2厘 68匁5分5厘替
19	内寄合、信濃守来宅	月番 3. 1	東御役所へ外出 海岸見分手続申談 同道にて城入、城代へ委細申上
21	御用日、信濃守来宅	2	御用日
24	専念寺参詣	3	組与力上巳御礼 本丸御殿拝見、雨天延期 兵庫年寄と面会
25	御用日、信濃守来宅 城代公事聴のため御越 大坂御備向申上書、城代書取を添え御下	5	御用日
26	城入	7	御用日
27	御用日、信濃守来宅	9	内寄合、信濃守来宅
非番 2. 1	月番送り	10	城入
2	御用日立合、東御役所へ外出	11	寺院梵鐘、大砲・小銃鑄換令報知
3	城入 備向談判	13	御用日
4	東御役所へ外出 備向談判 京橋口定番米倉丹後守屋敷へ外出 城代土屋、玉造口定番田沼も御越	15	信濃守海岸土砂留場所見分出発の連絡 川筋増水
5	御用日、東御役所へ外出	16	宿次寄合のため城入 海岸御備見込書、城代より堺の分とも御下
6	宿次寄合のため城入	17	金銭延商売会所の件、勘定奉行へ掛合書を提出
9	市中川々見廻 両川口、伝法川、尻無川	19	御用日 信濃守が見分より帰宅
11	城入 城代、定番田沼屋敷を訪問、自分も罷出 宿次寄合のため城入	20	城入
12	御用日立合、東御役所へ外出 城代公事御聴のため東御役所へ御越 自分も罷出	21	御用日
15	昨14日、岸和田城主岡部美濃守病死届、家来が差出 立田岩太郎、近海見分御用のため着坂	23	城代公事御聴のため東御役所へ御越 昼前後、透聞
16	石河土佐守、大久保右近将監、近海見分御用のため着坂	25	御用日 城代公事御聴のため御越 信濃守も来宅
17	石河、大久保、立田と城代が対話 自分が事前に、兵庫・西宮絵図、大坂絵図、新聞場図を用意、城代屋敷へ案内 両町奉行、堺奉行退散、東御役所へ移る 石河、大久保、立田の3人、城代邸退出後、東御屋敷を訪問 3人へ見分場所報知、諸書物を手渡	26	宿次寄合のため城入、頭痛欠席
18	天保山へ外出 風烈しく、船出不可、退散	27	御用日立合中止 城代両川口見分、信濃守案内
		28	京都町奉行より、江戸から西洋流3貫目玉筒、和流1貫目玉筒到来の連絡

非番	4, 1	組与力月並御礼 月番送り、用人、給人が東御役所へ罷出 城入		城代上屋敷の居間において、料理振舞 東御役所へ暇乞に罷越 給人知久権蔵、中村豊之進へ旅中入用の金 子を手渡
	2	御用日立合、東御役所へ外出		16 夜明供揃
	3	堺奉行所へ外出		17 土山を過ぎ、地震損しだいに強く
	5	御用日立合、東御役所へ外出		18 水口本陣泊
	6	宿次寄合のため城入		19 石薬師本陣泊
	7	御用日立合、東御役所へ外出		20 宮本陣泊
	8	城入		21 御油泊
	9	内寄合、東御役所へ外出 臨時川浚え申し上げの書面下書到来 異見なしと回答し返却 尼崎又右衛門来宅 御用召の件、内々申来る 本件、家老、用人、成瀬九郎右衛門、 内山彦次郎へ伝達 川上金五助暇乞のため来宅		22 新居番所損壊 浜松泊
	10	阿波町出火、出馬		23 浜松城大損 大井川渡り、島田泊
	11	昨今、城入用捨 信濃守今日城入		24 奥津泊 富士川渡る
	12	城代より即刻城入命令 老中連名の書付にて参府命令 直に東御役所へ罷越 信濃守より戸口復古の調書廻し来る		25 沼津城中惣潰れ 市中損壊家屋500余、死者80 沼津泊
	13	宿次寄合のため城入		26 沼津、三島より地震損強く 小田原泊
	14	惣年寄、其外町人暇乞の御礼		27 川路が下田よりの帰路、面会に来る 戸塚泊
	15	組与力月並御礼 城内廻勤		28 品川本陣泊 登城
			5, 1	御前にて長崎奉行に任命、300高に加増
			7	長崎へ出立

- 備考1. 「日新録 嘉永四年 歳次 辛亥 翰香館蔵板」、初代新潟奉行川村修就文書（新潟市歴史博物館所蔵）により作成。ただし本書冊には、川村が堺奉行から大坂町奉行に転役していることが記録されている。よって、表紙の年号は誤って記されたとみられ、本文書は、嘉永7年（安政元年）～安政2年の内容が掲載されている。
2. 表中の信濃守とは、相役の大坂東町奉行佐々木信濃守顕發である。
3. 表中の城代とは、土屋采女正寅直である。

表3 嘉永7年（安政元年）川村修就町奉行（西御屋敷）在任中の給人

役職	氏名
家老	知久権蔵 渡邊為右衛門
公用人	中村豊之進 上原源次郎（源八郎カ）
取次	板垣昇平 山田重右衛門
大目付	野々村市之進
書翰	金子六蔵

備考 「嘉永七年 大坂御役録」354.5-216、大阪府立中之島図書館所蔵文書より作成。

表2 町奉行勤務日程

日付	勤務日	日付	勤務日
1		16	宿次寄合
2	御用日	17	
3		18	御用日
4	内寄合	19	内寄合
5	御用日	20	
6	宿次寄合	21	御用日
7	御用日	22	
8		23	
9	内寄合	24	内寄合
10		25	御用日
11		26	宿次寄合
12		27	御用日
13	御用日	28	
14	内寄合	29	内寄合
15		30	

備考1. 「雑書 四」常陸国土浦土屋家文書（人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵）、『大坂御城代公用人諸事留書』下大坂市史史料第三十九輯（大阪市史編纂所、1994年）より作成。
2. 御用日は公事日、内寄合は評議日に相当すると考える。

つまり、月に四日前後は、単独で城代に会い、月に三〜四日は寄合の際を中心に城代、定番に出会っていた。その合間を縫って、町奉行は訴訟を処理し、行政上の書類を作成し、用談や軍事訓練をこなした。町奉行職は、激務とは言えないまでも、御用繁多であった。ただし、宿次寄合、御用日、内寄合といった大坂の幕政における重要な評議機関が、プチャーチンの来航や、南海地震の発生時などの非常時には、多くが中止となっていたことが本稿で明確となったのである。このことも「日記書抜」から認識できた大きな成果である。

川村と相役の佐々木は、当時の重点政策として、大坂の戸口復興、経済再生をめざしていた。大坂は、水野忠邦による天保の改革の影響もあってか、人口は減少し、都市の衰微が問題となっていた。川村、佐々木の両人は、大坂市中の繁栄策と市中人口増加策を「取調帳」にまとめ、城代の土屋寅直を通じて江戸の幕閣に幕府宿次（継飛脚）で送付したのである。表1では、嘉永七年十一月二十三日、同十二月十日などに、「戸口復古」達成のための書類三冊が、両町奉行の間でやりとりされていたことを重視したい。

表1によると、同年七月、両町奉行は大坂三郷、兵庫、西宮の富裕な町人を交替で呼び寄せ、上納金納入を求めている。前年の嘉永六年十一月には、大坂湾岸の海防費や西之丸御殿再建費を捻出することが、幕府では重要問題となっていた。この上納金徴収が、町奉行の重要な任務であったと解される。⁽²⁶⁾

軍事については、安政二年（二八五五）二月十七日、「大坂勢州近海御用」として、目付の石河政平、同大久保忠寛、勘定吟味役立田岩太郎が来坂し、城代の土屋や町奉行の川村等と対面していた。当期は朝廷権力が浮上してきており、その影響もあって、幕府は京都や伊勢神宮に近い、伊勢湾や大坂湾岸の海防に乗り出す必要があった。能吏として著名な三人は、大坂、兵庫、西宮沿岸の台場建設場所を中心に見分していたのである。

以上、町奉行は通常、城代、定番等と祭日の本丸参上、將軍家忌日の三ヶ寺（天満川崎の建国寺、天満寺町の専念寺、天王寺）参詣や、宿次寄合、御用談をこなし、さらに両町奉行は、月番交代で御用日、内寄合を主催し、幕府諸儀礼や大坂の行政を執行していたことを論述した。

ところで、この嘉永七年（安政元年）の大坂には、既述のごとく二つの大事件がおこった。プチャーチン来航問題と、安政の南海地震の発生という非常事態である。こうした非常時に町奉行がどのように職務を遂行していたのかという重要な問題を、以下の2と3で検証したい。

2. プチャーチン来航問題への対応

嘉永七年（一八五四）八月三〇日、ロシア海軍中将プチャーチンが箱館に來航したが、その際、彼は幕府に大坂へ赴くことを通告していた。⁽²⁷⁾

表1によると、同年九月十七日、突然泉州沖に現れたロシアのフリゲート艦ディアナ号が、西宮沖に進入し天保山沖に碇泊した。同十八日には、バツティラ船で安治川を遡上し大坂町奉行への面会を求めた。このため、城代は江戸へ「剋付」の幕府宿次（継飛脚）を発信し、ロシア軍艦の大坂來航という前代未聞の事態を報告し、大坂の町は騒然となっていたのである。そして、九月十九日には、天保山の城代土屋寅直、定番米倉昌寿、同田沼意尊の陣を中心に、総人数一万四千五百人程による「諸家御固」がなされ、安治川、木津川両川河口を中心に大坂湾岸の警備体制が整えられた。京都においても、近隣の譜代藩が動員され、御所には稲葉正邦（山城淀）と青山忠良（丹波篠山）、東寺には本多康融（近江膳所）、本能寺には井伊直弼（近江彦根）が配置され、厳戒態勢がとられたのである。⁽²⁸⁾

では、ロシア軍艦付属のバツティラ船が安治川を突然遡上し、「大坂町奉行閣下」に応接を求めたその翌日からの「日新録」の記事をとおして、この問題を検討しておこう。

それによると、川村は市岡新田や天保山に連泊するようになり、異国船応接掛に選出された東組与力八田五郎左衛門、西組与力山本善之助、御船手佐野亀五郎組与力太田資五郎などとともにロシア船來航に対応することとなった。佐々木、川村の両町奉行が天保山を中心とする大坂湾岸の警備を差配していたのである。城代、定番は大坂や西国における軍事を中心とする責任者であったわけであるが、町奉行主導で軍事上重要な「御固」やロシア船との交渉がなさ

れていたことに注目する必要がある。川村は、宿次寄合、御用日、内寄合に出席できなくなり、そもそもこうした定例の会合の多くが中止となっていたのである。ロシアなどの異国船の要求には、大坂では応じられないということについては、城代土屋寅直が老中阿部正弘等より幕府宿次（継飛脚）で改めて「差図」を受けていた。さらに今回に限り、ディアナ号に当座の食糧、薪水を与えて、下田へ廻航するよう町奉行へ命じること、城代の土屋は、江戸の老中に「伺」を出し、「差図」されていたのである。³⁰ここに、最前線で粘り強くロシア側と交渉し、薪や水、食料などを提供し、下田に廻航させた功労者は、川村や町奉行所の与力・同心、御船手組与力・同心であったことが推測できたのである。この交渉において、城代公用人の大久保要（親春）が関わっていたことは事実であるが、従来考えられてきたように、大久保一人がロシアとの交渉でめざましい活躍をしたとはいえないのではないだろうか。この「日新録」という川村自筆の勤務日誌からは、そのようには読み取れなかったのである。城代、定番、町奉行の佐々木や城代公用人は、大坂城二ノ丸でロシア船対応策を協議していたが、現場で実質的にディアナ号に対処していたのは、町奉行の川村と異国船応接掛の与力・同心であった。ロシア軍艦ディアナ号は大坂での交渉に見切りを付け、十月二日の会談を最後に、三日には俄に出帆して伊豆下田へ向かった。

異国船渡来中、両町奉行は諸国廻船の入津が減少し、諸商売が停

滞すること、見物人が大騒ぎをする状況を抑制することに注意を払うよう大坂三郷へ「町触」発令の指示を出していた。町奉行は与力・同心だけではなく、町年寄等の統轄者として主体的に都市行政を執行していたことを、ここで特筆しておく必要がある。

なお、当記録では、江戸の幕閣との通信を「宿次」（宿継）、京都町奉行等との交信を「宿送」と、語句を使い分けていたことにも注目しておく。

3. 大坂における津浪（津波）被害への対処

安政元年十一月四日に遠州灘沖を震源として発生した安政の東海地震（M8・4）、同十一月五日に潮岬沖を震源として発生した安政の南海地震（M8・4）、安政二年十月二日に東京湾北部を震源として発生した関東南部直下型の安政の江戸地震（M7・0）を、総称して「安政の三大地震」という。前項のロシア海軍のフリゲート艦ディアナ号は、この四日に安政の東海地震で発生した津波に下田で被災して損壊した。³³大坂では、南海地震が発生するおよそ半年前の同年六月十四日、伊勢、伊賀、大和に大被害をもたらした「稀成大地震」がおこり、その後十五日以上余震が続いていた。³⁴

ついで、同年十一月四日、五日と二日間にわたり、この年二回目の大地震が大坂をおそったのである。この地震は右記のごとく、安政の南海地震と称せられるプレート境界型の大地震であった。とくに五日の地震が大規模であったようで、夕方に発生した地震の後、

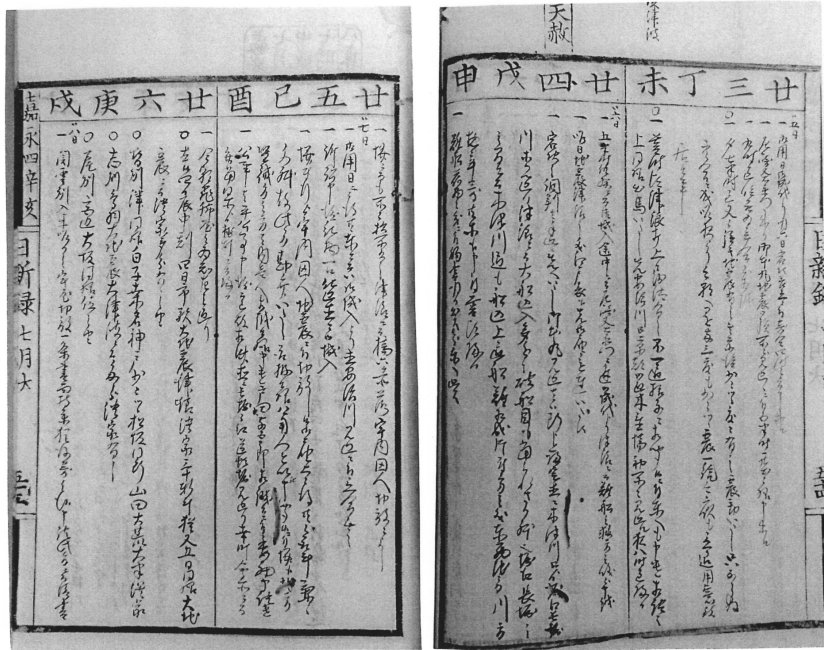


図3 「日新録」 嘉永7年(1854)11月5日～7日箇条

新潟市総務部歴史文化課所蔵初代新潟奉行川村修就文書。整理番号543。筆者撮影。

大坂の町に大津波が襲来したのである。その際の大坂の被災状況や町奉行所および住民の対応については、『大阪編年史』所収の諸史料に記録されており、また西山昭仁氏の詳細な研究で論じられているので、ここでは、その緊迫した状況を、川村自筆の「日新録」より【史料】⁽³⁶⁾として掲げ、町奉行の動きに絞って捉える。

【史料】(図3)

同五日

一 御用日、御城代より明六日宿次差立二付、寄合四時之旨申来ル

一 尼崎又右衛門来り、御本丸地震御損所被見廻候二付、五半時罷出候様申来ル

一 九時過、信濃為立合罷越

○ 一タ七半時過、又々強キ地震有之、其前後少々、度々有之、震動いたし只ならぬふり合二成、昨夜より今朝へ懸而三度も少々ツ、震、一統今夜も立退用意致居候事

○ 一暮時頃、津浪打上候沙汰有之、不一通様子ニ相聞候二付、東へも申遣相談之上同様出馬いたし、先安治川口京都御廻米置場初所々見廻ル、夜八時過帰る

同六日

一 五半時供揃ニ而御城入途中ニ而尼崎又右衛門二逢、御城代よ

り津浪ニ而難船之救方之儀被申越

一昨日地震、津浪之儀、江戸表江先御届進達いたす

一宿次之調判者、手廻ニ先へいたし、御本丸見廻者御断申上帰宅、直ニ木津川口より堀江、長堀川等見廻り、津浪ニ而大船込入、多分之破船、目も当られざる舳也、堀江、長堀之しまニ而木津川込も船込上、通船難相成片付方之儀、東西地方・川方、惣年寄共等江申付、暮頃帰る

一難船荷物之儀ニ付触書明日出ス分東へ廻ス

一堺ニ而も所々損所有之、津浪ニ而橋六ヶ所落、牢内囚人切放候よし

同七日

一御用日ニ候得共、東ニ而者御城入より直安治川見廻ニ付立合無之

一訴訟申渡、糺物一口仕廻、直ニ御城入

(中略)

一公事者平公事申渡而已故相済、直ニ長堀、堀江、道頓堀見廻り、幸町会所ニ而弁当、同所より提灯ニ而帰る

本史料は、大坂が大津波に襲われるという緊迫した場面を記録したものであり、とくに図3として「日新録」の写真を掲載した。この史料において、町奉行の動向を中心に強調しておきたい箇所には傍線を付したが、四日の地震では本丸など城内に破損箇所が出来し、

翌五日の地震ではさらに揺れが大きく、夕刻には大津波が大坂に押し寄せていたのである。川村家の人々は大坂を立ち退く準備をしていたが、修就自身は大津波による被災状況を見廻り、その対処方法を指示していたことがわかる。最終的には、惣年寄をはじめとする町人たちが難船の処理を請け負うことになるわけであるが、町奉行の川村は、大坂三町人の一人である尼崎又右衛門に積極的に指示を出すなど大坂の復興に関与していたのである。

さて、他の史料も使用して、もう少し詳細に当時の状況や町奉行の動きを検討しよう。

図4「瓦版 大坂大津浪図」のとおり、大津波は安治川、木津川だけでなく、長堀川、道頓堀川を遡上し、堀江、船場の堀割にも押し寄せた。安治川、木津川両川の高波は、とくに大きく、海岸、堀割沿いの低地や街路に溢れた水から逃げまどう人は夥しく、小船に乗り込

んで難を逃れようとした人々も多くは津波で流されたのである。木津川沿いだけでなく、道頓堀川沿い等にも大船、小船が押し寄せ、道頓堀川より南側一帯の難波村、木津村、泉尾新田といった広大な海岸沿いの地域は水没し、夥しい数の死者が発生していたことが本図より推察される³⁷。そのため、多くの市街の住民が上町台地方へ避難していったという。この大惨事は、宝永四年（二七〇七）に起こった宝永の南海地震に伴って大坂に襲来した大津波以来の出来事であった³⁸。十一月七日には、川村の元に伊勢、志摩、尾張国や

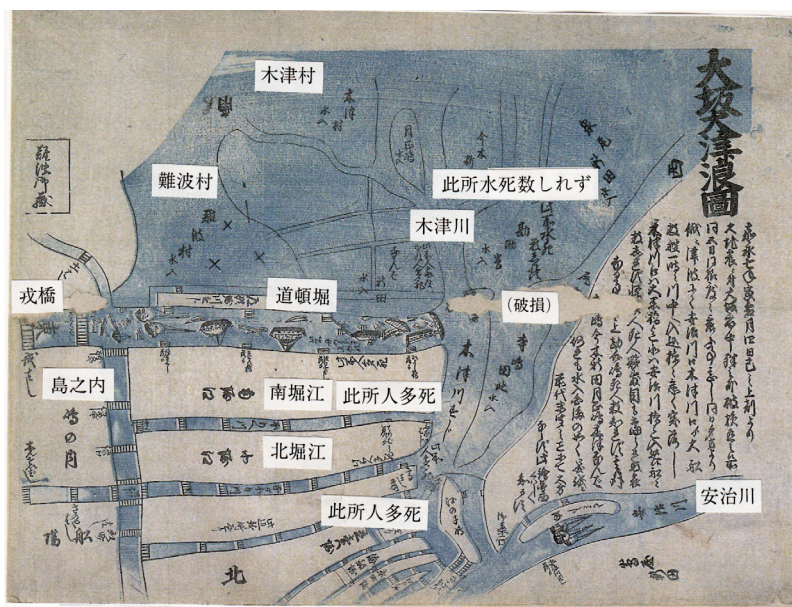


図4 「瓦版 大坂大津浪図」大阪城天守閣蔵

テーマ展南木コレクションシリーズ第11回展示図録『瓦版にみる 幕末大坂の事件史・災害史』
(大阪城天守閣、2011年)より転載。「難波村」、「道頓堀」など一部文字を書き加えた。

東海道沿いの城下町、宿駅からも続々と被災状況の報告があった。こうしたなかで、兵庫の町の被害は比較的軽く、損壊家屋はみられたが、負傷者はなかった。しかし、加古川宿は、損壊家屋が街道を塞ぎ、「替え道」が付けられたという連絡が到来した。また、大坂が被災したのと同時期の十一月四日〜七日には、広島や九州等でも大地震が起こり、死者、負傷者が多く発生したという。大坂の西の守りを固めていた尼崎の城下も津波の被害を受け大惨事となっていた。つまり、九州〜播磨にかけて人家は損壊し、死傷者が多数発生していたが、意外にも京都は大きな揺れを感じたものの被害は少なく、兵庫、明石、姫路に大津波が押し寄せたという記録は見出せなかった⁽³⁹⁾。ただ、南海地震の震源域あるいは震度によっては、西摂津、東播磨、西播磨などの瀬戸内一帯にも三メートル前後の大津波による惨事が想定されるであろう。

このように、東海、畿内およびその周辺と西国諸国は、京都周辺を除いて危機的状況となっていたという情報が大阪に続々ともたらされるなかで、川村は津波被害からの復興に立ち向かうことになった。

もちろん、津波被害からの復興に関する「町触」⁽⁴⁰⁾の作成は、町奉行所の与力や、三郷惣年寄等の主導でなされたのであるが、頻繁に被災地を見廻った川村の意向も、「触」の発令などに反映されていたと考えられる。表1によると、川村は十一月六日などに町奉行所与力や惣年寄に直接「津浪片付方」の指示を出していたのであ

る。

さらに、翌安政二年正月～二月、佐々木、川村の両町奉行は、町人の出資により、これまでに積み立てられてきた川浚冥加金のうち、都合銀一八貫七九〇目余を大津波からの復興費に運用することを要請していたが、この件は十月になってようやく、老中より城代へ下知があり、両町奉行に申し渡されていたことに注目したい。^④幕府の上方支配は、城代や町奉行の「伺」を尊重しつつも、江戸の老中の「下知」、「差図」により、遂行されていたことを強調しておく。

最後に、ロシア軍艦来航問題などで川村が監督していた組与力や家来について述べる。

まず、西組与力の中で著名な者として内山彦次郎がいる。内山は、天保期から幕末期にかけて、大坂の行政において辣腕を振るった。「大坂御役録」^⑤によると、彦次郎は、諸御用調役、勘定役、地方役、唐物取締定役を兼務していた。異国船応接係として活躍した山本善之助は、盗賊役、吟味役を兼務し、成瀬九郎右衛門は、諸御用調役、支配役、目付役、地方役、兵庫・西宮上ヶ地方、唐物取締定役を兼務していた。東組与力で著名な八田五郎左衛門は、異国船応接掛として川村のもとで活動していたが、寺社役、盗賊役、吟味役を兼務していたのである。

川村家の家来については、「大坂御役録」^⑥により作成した表3のとおり、家老の知久、渡邊、公用人の中村、上原、大目付の野々

村、書翰金子が記載されている。表1によると、川村が大坂町奉行に就任すると、東町奉行佐々木顕發の右筆金子六蔵を、川村家の給人として新たに召し抱えていた。また、江戸より到着した野々村市之進も、大坂町奉行などを勤めた幕臣の「渡りの用人」として活躍したことで知られている。^⑦他の川村家の家来たちにも、「渡りの用人」というよりも「渡りの給人」とでもいべき江戸出身者たちがおり、同家に一時的に召し抱えられていたとみられる。町奉行所行政が、大坂居付の組与力・同心だけでなく、江戸を居所としながら、少禄の幕府官僚に雇用されて「給人」となり、大坂など各地の幕領に赴任していた「渡りの給人」によっても担われていたことに注目すべきであろう。町奉行の給人は、月番時を中心に奉行を支援し、月番送りの際にも、家老、用人、書翰（右筆）が立ち合っていた。

安政二年四月十二日、城代の土屋より老中連名の書付が手渡され、川村は参府することになった。同月十六日に、川村は東横堀の西御役所前から乗船し、伏見へ向けて淀川を遡上した。十七日、近江土山宿を過ぎると地震の被害が大きくなり、江戸への道中では、新居番所損壊、浜松城大損と記録している。川村はさらに東へ進み、駿河沼津城下、伊豆三島宿の被災状況に驚愕する。小田原では、下田で安政の東海地震による津波の被害に遭遇していたディアナ号の艦長ブチャーチンに対応し、日露和親条約を締結した川路聖謨^{あきつ}に出会っている。同二十七日には品川本陣に到着し、翌日には登

城した。川村は五月一日には、將軍家定の御前で新たに長崎奉行に仰せ付けられていた。

以上、本節において、大坂町奉行の動向を知ることができる自筆日誌の「書拔」を一年に亘って初めて継続的に分析した結果、町奉行の軍事、外交、公事訴訟、経済活性化策、上納金徴収、被災地復興といった多岐に亘るその職責を、通常時と非常時に区別し具体的に論証しえたと考える。

おわりに

本稿は、町奉行所を統括していた町奉行自身である「御頭」の職務について、従来よりも具体的に言及していくことが重要であると認識し作成した。

左に新たに検証しえた事項を中心に整理しておく。

1. 町奉行の川村は、プチャーチンの来航問題や津波被害からの復興問題に取り組まなければならなくなると、通常どおり宿次寄合、御用日、内寄合に出席できなくなつた。宿次（継飛脚）については、城代、定番や相役の佐々木らが、通常と同じ頻度で差し立てていたが、非常時には御用日、内寄合は、中止となつていたことが明らかとなつた。

2. 川村は、城代の土屋寅直や相役の東町奉行佐々木顕發と連絡を取り合いながら、天保山の会所に出張し、プチャーチン来航問題に対処していた。その際、町奉行所与力八田五郎左衛門、山本善五

郎、御船手組与力太田資五郎等がロシア船との対応の最前線にあつた。城代公用人の大久保要もその応対に活躍していたとされているが、町奉行川村家の「日新録」からは、そのことを積極的に裏付けることができなかった。

3. 川村は、大坂で安政の南海地震に遭遇した。大坂においては津波による被害が甚大で、川村はその復興に追われていた。川村は、安治川、長堀川、道頓堀川などに打ち上げられた難船の処理を重視し、直接町年寄等の都市有力者に、その指示を出していた。プチャーチン来航時、津波後の被災地復興についての「町触」の発令は、町奉行所与力・同心や惣年寄だけではなく、町奉行自身の意向や發議によるものも認められるのではないか。大坂の町は、惣年寄をはじめ町人による高度な自治が発達していたが、有能な町奉行による行政上の指導性も評価すべきであろう。

4. 川村は佐々木と相談を繰り返し、天保期以来とくに、人口が減少し経済力が低下していた大坂の経済復興に腐心していたことが、明確になつた。川村は、自身が新潟奉行在任中に、新潟の町で採用した仲金制度を大坂でも導入することを提案していた。¹⁵遠国奉行を歴任するなどして幕領支配に係属した幕臣が、そのキャリアにおける経験を新任地で生かしていたことは、幕政を考察する上で不可欠である。

5. 川村は、もともと大坂町奉行に登用されるには少祿であり、彼らの家臣には「渡りの給人」が一時的に多く召し抱えられてい

た。このことを具体的に論証していくことは、幕府支配機構および大坂をはじめとする幕領行政の解明において、必至であろう。

6. 幕府は、大坂、兵庫、西宮などの富裕者に対する多額の上納金を、被災後にも免除することはなかった。上納金は西之丸造営費に続く禁裏御所再建費の捻出、被災した大名家からの拝借金⁴⁶の要求、さらには、列強の軍艦来航に備えるための軍事費の増大に対応するためのもので、町奉行にとって上納金の徴収は重要な責務となっていた。

7. 川村は、荻野流免許皆伝の力量を有し、西洋流砲術についても研鑽を積んでいた。砲術に対する知見が買われ、川村等の幕臣に活躍の場が与えられたことに着目しておきたい。川村は、新潟、堺、大坂の海防問題だけでなく、大坂の経済活性化、プチャーチンの来航、津波襲来後の被災地復興といった幅広い分野の行政に向き合った能吏といえる。

8. 修就の孫清雄は、祖父の大坂赴任中に同行し、高麗橋居住の田能村直入（小虎）より文人画を学び、江戸の開成所では、川上冬崖、高橋由一より西洋画を教示された。その後、彼は洋行し、西洋画の画技を修めた。帰国後は明治美術会創設に関わり、明治洋画草創期の指導者となった。修就も書画を愛したが、その遺志は孫の清雄に確実に受け継がれていたとみられる。今後は、こうした旧幕臣の子弟が、日本の近代化の過程で、政治、経済、科学、芸術といった多様な分野で活躍したことを解明していく必要があるであろう。

ちなみに清雄の弟子には、幕府譜代の名家である摂津尼崎藩主の一族で、尼崎市長を務めた桜井忠剛^{たなかた}がいる。忠剛は関西美術会の創設に参加し、明治、昭和初期にかけて関西洋画の発展に尽力した⁴⁸。

さて、昨今幕府による上方支配の研究で成果を上げている藪田貫氏や小倉宗氏の研究と、本稿とを比較検討しておく。

町奉行は、まず内寄合（評議日）と御用日（公事日）の職務に専念しつつ、城代や定番との宿次寄合、城代との用談のため城入する必要があった。小倉氏は城代と町奉行とは密接な関係を取り結んでいたとするが、今回川村の動向を検討したところ、藪田氏が論じた⁴⁹とおり、町奉行は御用繁多のため、城代と交渉して不要な城入を抑制していたと解される。藪田氏が追跡した町奉行の新見正路は、大川浚え、それに伴う天保山（目印山）造成で活躍したが、本稿では、川村修就が大坂の経済発展、ロシア軍艦来航問題、大坂津波からの復興問題に最前線で取り組んでいたことが認識できたといえよう。

加えて、小倉氏は幕府上方支配機構の「相対的自立性」⁵¹を強調するが、本稿において論じたとおり、大坂の経済復興やロシア軍艦来航問題に関して、城代の土屋寅直は江戸の老中阿部正弘等に丁寧な「伺」を提出し、「差図」を受けたうえで、慎重に行動していたのである。所司代と城代を頂点とする幕府上方支配機構には、先例がある事案や非常事態発生時に限定されて「相対的自立性」が見出せる⁵²と一般化、普遍化しうるのである。

今後、引き続き、薩長出身者に限らず、幕末期・明治期に活動した川村家三代のような旧幕臣をはじめ非薩長系諸士の「日記」などの記録類や書画といった遺品を発掘したい。そして、その成果を総合的に解析していくことにより、日本の近代化の諸相がより具体的に明らかになると考える。⁽⁵³⁾

本稿は、幕府の上方行政と日本の近代化に直面していた幕臣の「家」に関する研究であるが、敢えて付言しておく。

安政元年から二年にかけてのわずか二年間に起きた安政の三大地震のため、江戸、大坂だけでなく、東海地方と西国でも大地震と大津波により甚大な被害が発生していたことが、当時の文書をとおして解明できた。現在その被災地域には、原発も存在する。関西の電力需要を支えているのは、琵琶湖にも近接し、敦賀原発敷地内を走る浦底断層をはじめとする活断層が多い嶺南地方である。この地域は「原発銀座」と称され、我々はそのことから目を背けることはできない。

核廃棄物の問題も解決されていない今こそ、国はドイツ同様「脱原発」という決断をし、太陽光、風力、水力、バイオマスなどの再生可能エネルギー利用への道を歩む方が、将来の日本経済、過疎化に悩む地域経済や国民生活にとって、必ずやプラスとなり、国益ともなろう。西山昭仁氏は宝永の大坂大津波のことが語り継がれていなかったことが、安政元年の大津波の際に被害を拡大したと検証した。⁽⁵⁴⁾ 大飯原発の再稼働問題に象徴されるように、現在日本は「大地

震」の問題と併せて「福島」の意味を問い直し続けることができるかどうかの瀬戸際にきているのである。

註

- (1) 村田路人「元禄期における伏見・堺両奉行一時廃止と幕府の遠国奉行政策」(大阪大学大学院文学研究科紀要) 四三、二〇〇三年。
- (2) 熊谷光子「大坂町奉行所における明和期の仕法改正について」(塚田孝編『近世大坂の法と社会』清文堂出版、二〇〇七年)。
- (3) 内田九州男「大塩事件と大坂城代」(大塩中斎先生顕彰会大塩事件研究会『大塩研究』一三、一九八二年)。
- (4) 野高宏之「大坂町奉行所の当番所と当番与力」(大阪市史編纂所『大阪の歴史』四六、一九九五年)。
- (5) 曾根ひろみ(「近世」大阪における訴訟と裁判——金銀出入を中心に——)『ヒストリア』一一三、一九八六年、同「与力・同心」論——十八世紀後半の大坂町奉行所を中心に——(『神戸大学教養部紀要論集』四〇、一九八七年)。
- (6) 藪田貫「大坂町奉行の世界——新見正路日記の研究・序説——」(大阪市史編纂所『大阪の歴史』五八、二〇〇一年初出、のちに同『近世大坂地域の史的研究』清文堂出版、二〇〇五年所収)。
- (7) 渡邊忠司「大坂町奉行所異聞」(東方出版、二〇〇六年)。
- (8) 藤井嘉雄「大坂町奉行と刑罰」(清文堂出版、一九九〇年)。
- (9) 企画展図録『川村修就とゆらく幕府支配』(新潟市歴史博物館編、二

〇〇五年」によると、当文書を含む修就の遺品は、孫の清雄氏によって大切に保管され、さらにその嫡男清衛氏の尽力により第二次世界大戦の戦火を免れ、のちに新潟市に寄贈された。

- (10) 丹尾安典「川村清雄研究寄与」(高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』中央公論美術出版、一九九四年)。

- (11) 「川村修就とゆらぐ幕府支配」(前出)伊東祐之氏執筆部分。

- (12) 「川村修就とゆらぐ幕府支配」(前出)伊東祐之氏執筆部分。『初代新潟奉行川村修就』(新潟市郷土資料館調査年報第二三集、一九九七年)。
『新潟県史』通史編5、近世三(新潟県、一九八八年)六四〇八頁。

昨今、川村修就の新潟奉行時代の研究として、中野三義「新潟奉行川村修就の民政」(『越佐研究』六八、二〇一一年)、同「新潟奉行川村修就の海防体制の確立過程について」(『地方史研究』六一―三、二〇一一年)が上梓された。

- (13) 前掲註(11)。

- (14) 久須美祐雋「浪華の風」(日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』新装版第三期・第五卷、吉川弘文館、一九九五年)。

- (15) 久須美祐雋「在阪漫録」(森銃三・朝倉治彦他編『随筆百花苑』第十四卷、中央公論社、一九八一年)。

- (16) 川村修就「蟹の囀り」^{あま}。修就が新潟の風俗を書き留めようとした推敲中の草稿。

- (17) 作者未詳「蟹の手振り」卷子本一卷、嘉永五年(一八五二)、紙本着色。引網の画、住吉祭礼の画、盆踊りの画、鮭網の画、潟漁の画、囲い船の画の六景から成る。

各画面には、川村修就による詞書が付されている。落款には、「雪汀」、「翠亀」とある。

寸法幅二十九センチ、長さ十二メートル二十センチ。新潟市歴史博物館蔵。

本図は、人々の生業、祭りの情景に、躍動感や臨場感がみられ、遠近法を取り入れた風景は、鑑賞者に郷愁を想起させる名品である。新潟に冬の訪れを告げる潟漁の画に描写されている松の木などには狩野派の影響がうかがえる。

ちなみに、「蟹」とは「海人」、「手振り」とは「生業」を指す。

- (18) 「大坂御役録」大阪府立中之島図書館所蔵文書、請求記号三五四・五―二二・四。

- (19) 姜鸞燕「近世中後期における武士身分の売買について——『藤岡屋日記』を素材に」(『日本研究』第三七集、国際日本文化研究センター、二〇〇八年)。姜氏は、奥右筆田中唯一宅にて侍奉公をしていたとある人物が、目白台の御徒佐々木家の養子に入った。その人物が顕發であり、彼はしだいに才覚を発揮し栄達を遂げ、二〇〇俵高の家禄を得たという。この顕發が、嘉永五年(一八五二)十月八日、奈良奉行より大坂町奉行に就任し、川村と同役となっていた。

笠谷和比古「能力主義のダイナミズム」『武士道と日本型能力主義』(新潮選書、二〇〇五年)。笠谷氏は、川路聖謨、井上清直兄弟を事例として近世の幕府官僚制には能力主義による人材登用がみられ、開明的であったことを力説している。

- (20) 「序」(高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』前出)。丹尾安典「川

村清雄研究寄与」(前出)。荒井義雄「留学生川村清雄」(高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』前出)。河北倫明・高階秀爾『近代日本絵画史』(中央公論社、一九七八年初版、一九八五年再版)五四〇頁。落合則子「川村清雄の海軍関係作品の制作経緯について——江戸東京博物館所蔵『川村清雄関係資料』および周辺資料からの検証——」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第16号、二〇一〇年。同「明治後期における川村清雄の作品売買の様相——川村家の親族と三井系人脈の関係にみるパトロネージの実態——」(『東京都江戸東京博物館紀要』第1号、二〇一一年)。

これらの諸研究によると、清雄は油彩画の日本化をめざした。帰国後の大作「かたみの直垂」をはじめ、その筆致や題材は日本的傾向を強める。清雄の画業は、近代における西洋画の移植とその日本的定着を考えるうえで、きわめて重要である。また、清雄には幕臣の系譜を引いているという自負があり、「徳川慶喜像」、「徳川家茂像」、「天璋院篤姫像」など徳川家関係者の肖像画などを描いた。修就の孫清雄が、明治新政府より存続が許された徳川宗家の援助を受け、絵画という芸術の分野で注目すべき足跡を残したのである。

(21) 「日新録 嘉永四年 歳次 辛亥 翰香館蔵板」新潟市歴史文化課所蔵、初代新潟奉行川村修就文書、整理番号五四三。とくに断らない限り、川村の動向に関するデータは、本書冊に依拠している。なお、幕末期に「日新録」などと称して、この翰香館蔵版のような、日付や暦などが予め印刷された冊子が刊行されていた。このことは、日本人が記録してきた「日記」を総合的に研究する上で注目すべきことであろう。

翰香館は、江戸の版元ではないかと考える。川村の大坂赴任中以外の日

記についても、「日新録」と表題が付されている。

(22) 砲術修業に専念していた修就は、長崎奉行在任中にその思いを以下のような歌に詠んだ。「火砲の歌よめとありければ、こころして学ひましなは、世のまもり、くにのまもりのはしり火のわさ

肥前州長崎府尹対馬守藤原朝臣修就。

川村修就書「火砲の歌」。

(23) 拙稿「享保改革期以後の大坂城二之丸における幕府宿次」(『政治経済史学』五一三、二〇〇九年)。

(24) 『大坂御城代公用人諸事留書』下(大阪市史編纂所、大阪市史史料第三十九輯、一九九四年)五三頁。

(25) 『新修大阪市史』第四卷(新修大阪市史編纂委員会、一九九〇年)九二二〜九二六頁。

(26) 『大阪編年史』第二十二卷(大阪市立中央図書館大阪市史編集室、一九七六年)一七八〜一八一頁。

(27) 『大阪編年史』第二十二卷(前出)二三〇〜二三二頁。

(28) 前掲註(27)。

(29) 前掲註(21)、「日新録」九月十八日〜十月七日条。

(30) 『大阪編年史』第二十二卷(前出)二五七〜二五九頁。また、同二三頁によると、所司代脇坂安宅は二条大番頭本多忠郷に、大坂は外国使節応接場所ではないことを、ロシアに対して伝える旨を、「江戸伺」として上申するので、とくに心配はないと主張していた。

(31) 「大久保親春履歴及行状」人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵、常陸国土浦大久保家文書、整理・収納番号四三—Bの6。

(32) 『大阪編年史』第二十二卷（前出）。

(33) 宇佐美龍夫『最新版 日本被害地震総覧』（四一六）～二〇〇二』（東京大学出版会、二〇〇三年）一四八～一六九頁。

(34) 『大阪編年史』第二十二卷（前出）二〇八～二一三頁。宇佐美龍夫『最新版 日本被害地震総覧』（前出）一四八頁によると、この地震はM7を記録していた。

(35) 『大阪編年史』第二十二卷（前出）二七三～三〇〇頁。西山昭仁「安政南海地震（一八五四）における大坂での震災対応」（『歴史地震』一九、二〇〇三年）。西山氏は、グレゴリオ暦一八五四年十二月二十四日午後四時頃、大坂に押し寄せた津波が一・九メートルであったと想定した。大坂三郷での死者数は二二二～二七三名、その周辺地域を合わせると六二

一～六八二名に達したとした。菱垣廻船、樽廻船、北前船などの大船や剣先船、上荷船、茶船などの小船が安治川、木津川筋より道頓堀川などの掘割を遡上し、多くが破船となり、溺死者が多数に達し、大坂の住民が上町方面へ避難していたことを論じた。また同氏も、筆者同様後掲註（38）

「大地震両川口津浪記」に注目し、宝永の南海地震（一七〇七）に伴う大坂大津波による被害の教訓が伝承されていなかったことを指摘した。

さらに、西山氏は当地震の際には、大阪の住民は子孫のためにその教訓を諸記録に書き留めたことを強調した。この年の二ヶ月前の六月十四日と十五日には、大坂の人々は伊賀上野地震といわれる内陸型地震を経験しており、津波の発生を予期できておらず、家屋の倒壊などを恐れ川船に避難する習慣が付いていたとみ、そのことが溺死者を増加させていたと考察した。

加えて、同氏は大坂町奉行所が「触書」や「口達」を発令して、火の用心などについて注意を促し、被災地住民へ積極的に指示を出していたことを明示した。

(36) 前掲註（21）、「日新録」十一月五日～七日条。

(37) 「瓦版 大坂大津浪図」大阪城天守閣所蔵。本図によると、戎橋手前の大黒橋付近まで大型船、小型船が入り込み、多くの橋が崩落している。通常「大坂図」は、北の方角を上部としているが、この図は大津波が押し寄せた南の方角が上部になっていることは、興味深い。

(38) 「大地震両川口津浪記」安政二年乙卯年七月 幸町五丁目渡場建之。大阪市立中央図書館所蔵、請求記号四五三。現大阪市浪速区大正橋東詰に碑文が現存。

前掲註（35）でも述べたとおり、大坂の住民は、南海トラフを震源とする慶長の南海地震（一六〇五年）、宝永の南海地震（一七〇七年）で津波の被害を受けていたが、この安政の南海地震（一八五四年）の際にも減災の教訓がほとんど生かされていなかったことが認識できる。

(39) 前掲註（35）。

(40) 『大阪編年史』第二十二卷（前出）二七二～二八四頁。

(41) 「安政二卯 從正月至三月 御用留」大阪市立中央図書館貴重書庫蔵、常陸国土浦土屋家中大久保家文書。

(42) 大阪府立中之島図書館所蔵文書、請求記号三五四・五二一六。

(43) 前掲註（42）。

(44) 宮地正人「幕末旗本用人論」（同『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九年）。同「歴史学をどう学ぶか——幕末維新期研究を

手がかりに——(大阪歴史科学協議会『歴史科学』一六五、二〇〇一年)。

- (45) 「万延二年辛酉三月七日 久世大和守殿江御直ニ上ル、御城代江も御控上ル御内々申上候口上覚」新潟市歴史文化課所蔵、初代新潟奉行川村修就文書、整理番号七四五。川村が二度目に大坂町奉行に在任した際に、新潟同様大坂においても仲金制度を導入することを、老中久世広周や城代本庄宗秀に上申していた際の貴重な文書である。

- (46) 「温恭院殿御実紀」(新訂増補国史大系第五十巻『続徳川実紀』第三篇、吉川弘文館、一九六六年)二三八～三九頁、二四三頁、二四七頁。

- (47) 『大阪市史』(一九一一年初版、一九七九年復刻版)一〇二一～二二頁。

- (48) 尼崎市総合文化センター開館三十周年記念展 展示図録『桜井忠剛と関西洋画の先駆者たち——洋画の先駆者にして初代尼崎市長』(尼崎市総合文化センター、二〇〇五年)。

- (49) 小倉宗「近世中後期上方の幕府支配機構と京都・大坂町奉行」(『史料』九二―四、二〇〇九年)。同「近世中後期幕府の上方支配機構における京都・大坂町奉行」(『日本史研究』五六八、二〇〇九年)。

- (50) 藪田貫・佐久間貴士編『大坂西町奉行新見正路日記』(清文堂史料叢書第一一九、二〇一〇年)。

- (51) 小倉宗「近世中後期の上方における幕府の支配機構」(『史学雑誌』一七―一一、二〇〇八年)。

- (52) 拙稿「嘉永・安政期の大坂城代——常陸国土浦藩・土屋寅直の大坂、兵庫開港問題への対応を中心に」(『日本研究』第四三集、国際日本文化研究センター、二〇一一年)。同「近世前・中期における京都所司代による

朝廷統制と上行政——貞享期の土屋政直と正徳期の水野忠之の職務に注目して」(『政治経済史学』五三四、二〇一一年)。

- (53) 菊地久「維新の変革と幕臣の系譜——改革派勢力を中心に(一)」『北大法学論集』二九―三、一九七九年)、菊地氏は、開明派の幕臣やその子弟が、官界をはじめ様々な社会領域に進出したことに着目した。

- (54) 西山昭仁「安政南海地震(一八五四)における大坂での震災対応」(前出)。

付記

日文研の基礎領域研究である古文書研究会(研究代表者笠谷和比古教授)では、大坂町奉行日記の一つである「日新録」(初代新潟奉行川村修就文書)の全翻刻作業をめざす。本稿は当作業を進めていく中でうまれた論考である。共同研究会報告の当日には、倉本班共同研究員の方々に、さまざまな視点から有意義なご指摘を頂き、深甚の謝意を表す。

二〇〇九年八月以来、新潟への史料調査において、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士後期課程社会系教育講座教授の浅倉有子氏や同教授の原田誠司氏、新潟市歴史博物館副館長の伊東祐之氏にたいへんお世話になった。

また、地震、津波については、筆者の勤務先である淳心学院高等学校地学教諭の中尾朋央氏にいろいろとご教示を乞うた。

ここに記して、皆様のご厚情に対する御礼の辞としたい。